
私が起こす奇跡

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が起こす奇跡

【Nコード】

N2133T

【作者名】

春後秋前

【あらすじ】

——私が、死んだのは十七日の午後だった。

——私が、死んだのは十七日の午後だった。

*

血に濡れて仕事をやり抜けた私は、今日殺めた人数を数えていた。およそだが、八人。

あの犬ところもいれると、八人と一匹。護衛の奴らが何人だったかよく分らないが。

「……報酬に比べると、得かねえ」

財布はあの頃と比べると、かなり厚い。だが、心は薄っぺらい。

——抜け出せない迷宮へ堕ちてしまった。

殺人を犯し、政治を裏から操る者の手伝いをし、悪の道へと堕ちた。

私が生きていくには、暗殺者として駆け回るだけしか方法はない。正攻法で生きるための金など稼げないのだ。全てが泥濡れた世界で、私一人血塗られていようが誰も気にしないだろう。

「消えてしまいたいなあ？」

遠くを見ると、暖かな燈に包まれて一夜を過ごす家族が見えた。

ああ、なりたい。ああに、戻りたい。

帰してくれと、切実に願う。この道を選んだのは私自身なのに。

自分で自分の墓穴を、掘りにでも行こうか。そこに埋まって、餓死でも望もうか。

「また、逃げるのか」

ぼそりと言うと、やけに大きく聞こえた。

逃げてばかりの人生だった。自らの境遇を脱し、次の重枷をも外し、自らを奮い立たせて悪の道を通つ切っている……と言えは聞こ

えはいいだろう。だが、裏を返せば逃げだ。自らの人生から逃げ、重枷からも逃げ、楽な悪の道に逃げた。そして悪の道からも逃げようとしている。

乾いた笑いは、もう尽きてしまった。

「へヴ、つて君の事？」

そんな私に、彼が現われた。

身長は高く、なかなか面構えのよい好青年。私より、少しばかり年齢は高いだろう。

「ああ、私の事だが。何だ、暗殺依頼か」

「ええ、まあそんな所だけど。暗殺じゃないなあ。——へヴ、君を護りたい」

護りたい。さらりとそいつは口にした。

——あの、手段か。

「悪いが、帰れ。心地よい言葉でも使つて、私の背中を討ちたいだけだろう？」

「え？ 違うよ。俺はリルラ。へヴ、君を護りたい。君の暗殺中の姿を見て、一目惚れしたんだ。へヴ、君はとても綺麗だ。とても、とても」

「なら、勝手にしろ」

私は快く承諾した。ようなふりをした。

にこりと笑う、そのリルラという男が一気に油断したのを見て——

その青年の身体を、首から二つに斬つてやった。

「え」

「よいつしょ、と」

小太刀を回転させ、腰へ。

倒れこんだ男の懷から、封筒を見つけ出す。

——暗殺依頼の、封書。内容は、へヴを殺せの一言のみ。

やはり、こうじゃないか。

「お疲れ様。ごゆっくり、冥府の道を」

返答は、無い。

誰も護ってやれない。護って欲しいとさえ思わない。

こうやって屍に臨む時こそが、一番楽なときだ。

死と生しか無く、それ以外の何者でさえ入り込めない境界へ入り込める。

その時だけが、一番楽なのだ。

「……ほんとに？」

暗殺者を殺したのは、久しぶりじゃないだろうか。

「どうせ、こんな風に死んでくんだ」

屍の頭を蹴り飛ばす。雑念も一緒に飛んでいけばいいのに。

「じゃあ、もうこんな道いやだわ。ほんと、いや」

こんな風に蹴り飛ばされて、やられて、なんてご免だ。

「一時の気の迷いで構わない。この道は、誰かにすがって生きるしかない」

私が一人で立派にやれるような、そんな生き様は無いだろうか。

例えば、裏で暴力やってる政治家を、正式に倒しちゃう。みたいな。

「……やろうと思えば、何でもできる。」

「ボランテア、なんてのもやってみたいかもな」

また屍を蹴った。

また蹴って、蹴って、さよならだ。

「また逃げるんだろうな……ってかき、人間の心って、どうしてこうしてこんなどうでもいい事で切り替わってしまうの？　ほんと、奇跡みたい。あたし、奇跡好きだよ。大好き」

そのまま屍を拾って、まとめてやる。

小さな穴を掘って、屍の一部を入れて印を切る。

この奇跡が長続きするようにも願いながら、彼の冥福を祈る。

「……あはは、逃げてる。あたし、逃げてるっ」
笑わずに笑う。

そして小太刀の峰で自分の首をたたきつけた。
正直、痛かった。

「これで、あたしは、私は、死んだ。よくある手段だけど」
首の痣は、もう三つもある。

「でも、これで最後。本当に最後にする」
その時、ちらほらと雪が降ってきた。
とつさに、屋根の下へと逃げ込む。

「あ、逃げた」

乾いた笑いが、やっと起こる。

「……私は、私を護ろう」
乾いた笑いは町に響く。

「それでもして、次は続けよう」

乾いた笑いは誰かの鼓膜を突き刺す。

「お金なんていらない。今度は、ただただ歩こう」
そして、雪の中歩き出した。

お金は所持金のみ。

どうせ、すぐ倒れる。

だけど、また立ち上がる。

（後書き）

一言でもいいので、コメントお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2133t/>

私が起こす奇跡

2011年10月9日22時57分発行